

令和 6 年 5 月 17 日現在

機関番号：32660

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K04544

研究課題名（和文）中近世における社家町の空間構造に関する研究－春日大社社家町を主な素材として

研究課題名（英文）A Study on Spatial Structure of Shake-Machi in the Medieval and Early Modern Periods -On the Object of Shake-Machi of Kasuga Taisha Shinto Shrine-

研究代表者

伊藤 裕久（Ito, Hirohisa）

東京理科大学・工学部建築学科・名誉教授

研究者番号：20183006

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、18世紀後期に建設された春日大社旧祢宜・藤間家住宅の建築遺構および藤間家史料などの文献史料の分析を通じて、春日大社社家町の町並景観と居住形態の変容過程と特徴について検討した。とくに、社家町の大半が焼失した1717年の高畑大火の前後の変化に注目した。その結果、町家型から発展した社家住宅の成立過程が具体的に解明された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで豊富な研究蓄積をもつ神社建築史に対して、神社境内を核としながら成立した都市空間と神社に供奉する多様な階層で構成される社家集団の居住形態については不明な点が多かった。それは、近代初頭に伝統的な社家制度が廃止されたために、とくに中下層の社家が廃絶したことの影響が大きい。

したがって、本研究において春日大社社家町を具体的事例として18世紀に遡る社家住宅および町並景観の特質が解明されたことの学術的意義は大きい。また研究成果は、藤間家住宅保存活用にも役立てられており、失われつつある社家の町並景観を継承するために社会的意義も有している。

研究成果の概要（英文）：This study seeks to clarify the transition of the townscape and the dwelling pattern of Shake-machi (Shinto priest town) of the Kasuga Taisha Shinto shrine in the pre-modern times through the analyses of the Toma family's house which was built in the late 18th century and the existent archival materials from Toma family archives. We especially examined the formative process of the dwelling pattern of Negi (the lower-class Shinto priest) in Shake-machi during the Edo era, while paying attention to the difference before and after the Great Fire of Takabatake in 1717. As a result, the process of formation of Shake house which evolved from the Machiya style, was clarified in detail.

研究分野：建築学（都市史・建築史）

キーワード：春日大社 社家町 近世 居住形態 祢宜 藤間家住宅 町家型

1. 研究開始当初の背景

「宗教と都市の関係を問う。」ことが「社会＝空間構造 (Socio=Spatial Structure)」に注目した都市史研究の中心的課題であることは言を俟たない〔拙稿「都市空間の分節把握」(吉田伸之・伊藤毅編『伝統都市』4分節構造、東京大学出版会、2010年所収)を参照]。建築史学では、古代から近代の宗教建築に関する膨大かつ精緻な研究蓄積をもち、また宗教的な核を中心に発展した町並・集落に関する調査研究の進展もみられるが、建築史と接合した都市史的視点から、それらを総合的に考察した研究の蓄積は、未だ十分とは言い難い。

筆者は、惣村と町場、寺内町、門前町、社家(御師)町、市場町、城下町など、一貫して中近世における宗教的な核をもつ都市・集落(以下、「宗教都市」と表記)を研究対象としてきた。その研究成果の一部は、伊藤裕久『近世都市空間の原景―村・館・市・宿・寺・社と町場の空間形成』(中央公論美術出版、2003年)などにまとめたが、その際の主要な課題は、現存する建築遺構や文献史料の制約から具体的様相に迫ることが難しい中近世移行期の都市において、都市住民の居住形態の精緻な復原的考察を試みることで、都市空間の生成過程と空間構造の特質を解明することであった。中世までに成立した宗教的な核(寺院・神社あるいは富士山など)の存在は、近世以降も存続しながら近世都市社会＝空間構造の生成や変容プロセスに多大な影響を及ぼし続けており、時代区分を超えて長期に亘って都市の動態を捉えることのできる研究対象とすることができる。

さて、前書において、とくに大きな研究成果であったと考えているのは、伊勢神宮の門前都市として中世以降に発達した宇治(内宮)・山田(外宮)(平成10～12年度・科研基盤研究(C)「中近世移行期の都市空間の成立・変容過程に関する研究―伊勢国宇治・山田を主な素材として」に拠る)および富士登山信仰の拠点として北口本宮富士浅間神社の門前都市として中世末に形成された富士吉田(上吉田・下吉田)における都市社会＝空間構造の具体的な解明である。いずれも中世に起源をもつ社家(御師)層の家々が核となりながら、商工業者・芸能民など多様な住民階層が神社に供奉することで、「分節的構造」をもちながら集住した重層・複合的な都市社会＝空間があったと結論付けられる。それは、宗教的な核をもって発展した日本における伝統都市の典型的な都市類型と捉えられるものであり、今後も古代・中世に起源をもつ神社を核とした社家町・門前町の総合的な比較研究の蓄積が不可欠と考える。

2. 本研究の目的

本研究では、新たな検討対象として春日大社社家町を取り上げ、2017年2月から保存活用プロジェクトに協力している春日大社の社家(祢宜)・藤間家住宅(奈良市高畑町)の屋敷構・建築遺構調査と同家に所蔵される藤間家史料等に基づく総合的分析を基本として、春日大社社家町の空間構造の具体的な復原を試みることを主たる目的としている。中世史で著名な「春日神人」の集住地である北郷・南郷はすでに鎌倉時代には成立し、旧社家制度が廃止される明治5年(1872)まで存続した。しかし旧社家・祢宜の殆どが退転し建築遺構や文献史料が失われたために、現在、町並保存や調査研究の進展がみられる上賀茂の社家町などとは対照的に建築史・都市史研究の蓄積はほとんどみられないのが現状である。

中世神人の系譜を持ちながら近世の有力祢宜となった藤間家の住宅遺構は少なくとも18世紀後半に遡ると推定されることから、春日大社社家町の空間的実態を明らかにすることの可能な貴重な建築遺構といえる。さらに出雲大社の社家町・門前町である杵築など幾つかの他都市との比較分析を試みることで、中近世における社家町の空間構造の歴史的特質を具体的に検討したい。

3. 研究の方法

本研究において、伝統的な社家集団の居住形態を比較するための調査対象とした神社は、前述の通

り既に詳細な検討を加えた伊勢神宮（三重）、北口本宮富士浅間神社・窪八幡宮（山梨）、本研究のテーマである春日大社（奈良）の他、出雲大社（島根）、上賀茂神社・下鴨神社・北野天満宮・石清水八幡宮（京都）、大阪天満宮（大阪）、備前吉備津彦神社、備中吉備津神社（岡山）、備後吉備津神社・厳島神社（広島）大宰府天満宮・宮崎宮・櫛田神社（福岡）である。それぞれの社家町・門前町に関する文献・絵図・地図史料等を新たに蒐集するとともに、それらをもとに現地において社家住宅や歴史的町並の保存状況などに関するマッピングと写真撮影を実施した。

4. 研究成果

本稿では、春日大社の旧祢宜・藤間家住宅(奈良市高畑町)の建築遺構調査と同家に所蔵される『藤間家文書』等の文献および地図・絵図史料に基づく調査研究の成果を報告する。

中世史で著名な「春日社神人」(祢宜とも称される)の集住地である北郷・南郷の社家町は、すでに鎌倉時代には成立し、旧社家制度が廃止される明治5年(1872)まで存続した。しかし、旧社家・祢宜の多くが退転したために建築遺構や文献史料が失われ、町並保存や調査研究の進展がみられる上賀茂の社家町などとは対照的に建築史からの調査研究は殆どみられない。

本調査研究では、地図・絵図史料及び土地所有や住民構成が判明する明治初頭の「検地帳」「人籍帳」(藤間家文書)などの史料群を重ね合わせることで明治初頭の社家・祢宜集団の集住形態の特徴を抽出し(1)、近世における社家町の変容過程を踏まえた上で(2)、社家町に唯一、ほぼ完全な形で近世の屋敷構・建築遺構が残された旧祢宜・藤間家住宅の実測調査によって、同住宅の建設・増改築過程について復元的考察を加え、建築的特徴を明らかにした(3)。以下、その結果について概要を示す。

さて、近世における春日大社の神社組織は、正預(中臣系)、神主(大中臣系)、若宮権神主(若宮神主・世襲)という三惣官を勤める家柄の三つの社家集団(社司・氏人)と、それぞれに属する南郷

(正預方)・北郷(神主方)・若宮(若宮方)という三方祢宜(神人)集団で構成された。南・北郷の名称は、中世以前の居住地に由来する名で、南郷は春日大社の南に位置する「高畑郷」、北郷は北に位置する「野田郷」とされている(図1)。野田は奈良公園内に取り込まれ痕跡をとどめていないが、藤間家の立地する高畑は、志賀直哉が旧居を構えるなど閑静な近代住宅地として継承され、門と土塀の連続する歴史的景観や近代和風建築が残されている。

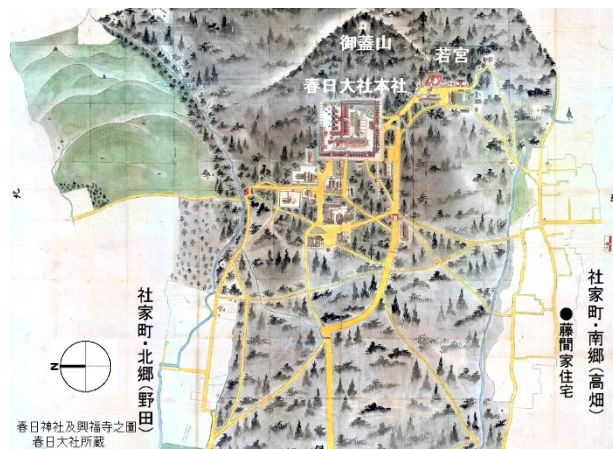


図1 春日大社の社家町-南郷(高畑)と北郷(野田)

(1) 明治初頭における社家町の空間構成と居住形態

高畑については明治初頭の社家町および社家・祢宜屋敷の詳細がわかる明治5年(1872)「春日神官住居大略地図」が残されている。測量地図とは異なるために地割形状や規模がデフォルメされていることから、作成時期に近い測量図として明治12年(1879)「大和国添上郡高畑村地引絵図」の道路・水路形態や地目・地割を下図とすることで社家・祢宜屋敷などの情報を比定した(図2)。

社家屋敷群は、主軸となる柳生街道沿いには立地せず、集落東南の若宮神主・千鳥家の居館を中核とした東部地区Aと、街道の北側を並行して走る裏道(寺中へ通じる道)の西部地区Bに集中している。地区Aでは、若宮神主・千鳥祐順家を中心に中臣・大中臣社家が集まり、往還から発生した辻子群が重要なアプローチ路となる。街道に面する社家屋敷はなく、街道沿い(①~④)には、米屋・餅屋・酒屋・八百屋・大工など商工業者の町家が分布している。地区Bでは、Z下山道に繋がる裏道の辻から西の両側(⑩北ノ大道町・⑪丸山町)に社家屋敷が並ぶ。辻には「社家惣蔵」が配され、南面



図2 明治5年(1872)社家・祢宜屋敷の分布と地割形態

の西側に大中臣社家が集まる傾向がみられる。

一方、祢宜屋敷群は、柳生街道沿いの両側町を構成する⑤上高畑町、⑥高畑町、⑦神戸穂町、北側の裏道の両側に面する⑩新開町・⑪旧名宮ノ前町が最も特徴的であり、殆どすべてが祢宜屋敷である。街道沿いの⑤の北側には「祢宜三方蔵」があり、⑥の北側には、「町番所」が設置されている。これらの祢宜屋敷は、比較的間口規模が揃った短冊形地割をもち屋敷地尻の地割線も隣家と揃っているものが多い。「新開」と称されるように、計画的な祢宜町として整備された地区と推測される。その他、前掲の地区Aでは、辻子に面する祢宜屋敷も確認でき、表から奥へと町家⇒祢宜屋敷⇒社家屋敷という若宮神主居館を中心とした同心円的な空間構成を読み取ることが可能である。

なお、新出の『藤間家文書』によって判明した「上高畑町屋敷地割復原図」(図3)および祢宜屋敷の家族構成(表1)を示す。表1の番号は、図2に一致する。

(2) 近世における社家町の変容過程と居住形態—高畑町の変容

藤間家の所在する高畑町は、元禄2年(1698)にはすでに「祢宜町」として御赦免地となっている。家数は80軒、内1軒の社家屋敷の他はすべて祢宜屋敷であり、柳生街道の両側に短冊形地割を持つ祢宜屋敷群が並ぶ両側町を形成していたとみられる。「新開町」とともに中

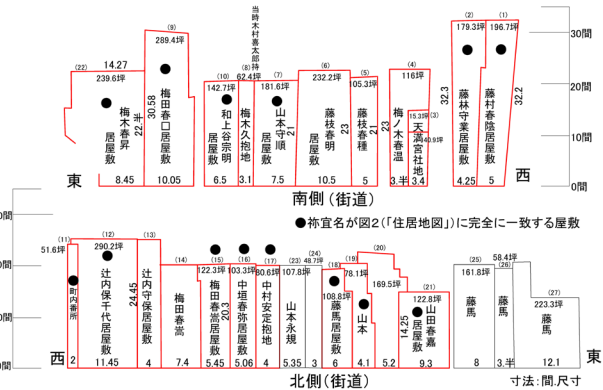


図3 明治6年(1873)上高畑町屋敷地割復原図

表1 祢宜家の家族構成(明治4年「人籍帳」に拠る)

【高畑町】31軒+同居12			【丹飯横町】7軒+同居1		
01 梅木一(春昇) 51歳	6人	男3女3	36 山田豊實(春尚) 61歳	5人	男2女3
02 梅田省吾(春保) 23歳	3人	男2女1	37 山田勝(春肥) 27歳	4人	男1女3
03 村上谷郷美(宗明) 42歳	7人	男3女4	38 藤谷廣根(死去) 54歳	5人	男3女2
同居 梅木留三郎(宗賢) 7歳			同居 藤馬貞(永○)		
04 山本時興(守順) 16歳	1人	男1	39 若宮隆○(春時) 38歳	3人	男1女2
05 藤枝老人(春○) 61歳	4人	男3女1	40 藤林進(春種) 20歳	3人	男1女2
06 藤枝武三郎(春朋) 13歳	5人	男3女2	41 丹飯壽男(定清) 62歳	5人	男2女3
07 中村豊吉(春長) 45歳	5人	男2女3	42 丹飯豊根(清平) 25歳	1人	男1
同居 梅能本發男(春通) 13歳					
08 藤林直臣(守榮) 44歳	5人	男1女4	【客養寺町】5軒+同居3		
同居 奥野藤江(なし) 10歳 印×(養女)			43 丹飯経世(清延) 52歳	6人	男3女3
09 藤村幸○(春隆) 53歳	5人	男3女2	同居 池上勇雄(清宣) 22歳		
同居 山田鉄丸(なし) 2歳			44 丹飯徳美(安道) 65歳	8人	男3女5
10 梅木左織(春意) 57歳	4人	男2女2	同居 梅木豊美(安伸) 22歳		
11 梅木辰三郎(春厚) 16歳	3人	男1女2	45 福井護(春益) 23歳	2人	男1女1
12 藤間廣胤(守厚) 21歳	5人	男2女3	46 梅木定雄(死去) 57歳	5人	男2女3 清實
13 中垣康夫(永辰) 22歳	1人	男1	47 榎木操(春和) 4歳	5人	男3女2
14 福井慎省(春韶) 38歳	4人	男2女2	同居 藤井勝見(守矩) 53歳		
15 高井福也(守守) 49歳	5人	男3女2			
16 松本九十九(春延) 44歳	6人	男3女3	【新開町】14軒+同居1		
同居 野村裕二(春盛) 11歳			48 中根良(利之) 45歳	5人	男2女3
同居 福井賢治(なし) 3歳			49 梅木勝次(延清) 15歳	1人	男1
17 梅村圓(永保) 36歳	5人	男2女3	50 山本直見(春邑) 48歳	5人	男3女2
18 榎原胤(守華) 60歳	6人	男3女3	51 大宮徹(守栄) 54歳	4人	男2女2
同居 榎原喜一郎(守正) 8歳			52 榎集(守臣) 52歳	4人	男2女2
19 中村敬雄(安定) 32歳	4人	男2女2	53 酒殿菅根(春恒) 60歳	3人	男1女2
20 加藤洲主(春脩) 40歳	4人	男2女2	54 山口忠雄(春緒) 64歳	4人	男2女2
21 梅木喜内(春昌) 27歳	1人	男1	55 梅木秀澄(春郷) 43歳	4人	男2女2
22 福井成城(春宣) 40歳	4人	男1女3	56 丹飯猪人(春秀) 31歳	3人	男1女2
23 梅木嘉悦(春堅) 35歳	5人	男1女4	57 若宮登根(春雄) 51歳	4人	男2女2
24 梅木愛人(春喜) 62歳	3人	男3	58 山口幸之祐(なし) 5歳	5人	男1女4
25 福井真澄(遠永) 44歳	6人	男5女1	59 山口吉尾(春晏) 66歳	2人	男1女1
同居 福井琢磨(永○) 17歳			60 大宮正雄(守和) 48歳	5人	男3女2
26 北内保千代(守保) 8歳	4人	男1女3	61 梅木深(春遠) 55歳	7人	男5女2
27 梅田勇(春富) 47歳	4人	男3女1	同居 梅木光純(春浄) 25歳		
同居 梅木椿尾(春興) 4歳			【北大道町】2軒+同居1		
28 中垣正雄(春彌) 26歳	5人	男2女3	62 丹飯綱根(徳博) 42歳	3人	男1女2
同居 藤林直敏(守奥) 16歳			63 山口治(永訓) 28歳	2人	男2
29 藤馬福見(地永) 64歳	3人	男2女1	同居 榎原勇(永秀) 22歳		
30 山本放四郎(永規) 11歳	5人	男2女3	【丸山町】5軒+同居6		
同居 梅木紀夫(春隆) 40歳			64 丸山秀真(守奥) 29歳	4人	男1女3
31 山田新(春嘉) 28歳	4人	男2女2	65 梅木精一(春英) 36歳	2人	男1女1
【新薬師町】4軒			66 梅木幸雄(安民) 36歳	5人	男3女2
32 福井国雄(死去) 39歳	6人	男2女2 春愛	67 辻井防禦(安鎮) 16歳	1人	男1
33 拜殿正臣(清雄) 22歳	4人	男1女3	68 藤岡胤美(守道) 25歳	15人	男9女6
34 福井国風(春博) 28歳	4人	男1女3	同居 藤野正見(守宣) 32歳		
35 福井潤(春矩) 43歳	4人	男1女3	同居 廣島茂根(守都) 42歳		
			同居 藤岡隆(守義) 62歳		
			同居 宮松真真(守収) 55歳		
			同居 福井梅丸(ナシ) 4歳		
			同居 丹飯国見(守夫) 29歳		

世末から近世初期にかけて計画的に町並が整備されたことが考えられる。

しかし、図2に示された明治5年(1872)の祢宜屋敷数は元禄期の半数程度に過ぎず、各屋敷の間口規模は倍増したことになる。享保2年(1717)の大火では「当町両側過半焼亡」と甚大な被害を被っており、その復興過程で屋敷の統合整備が進められた結果とみることが可能である。18世紀初期以降の社家・祢宜屋敷数の減少が、一般的な町家の短冊形地割とは異なる間口規模の大きい短冊形地割を持ち、表門・築地塀・前庭・玄関などが整えられた、藤間家のような近世社家住宅らしい屋敷構が連続した「社家町」の町並形成をもたらしたと考えられるのである。

(3) 藤間家住宅の空間構成（屋敷構・平面・架構）と当初復原

旧柳生街道に面して北向きに本瓦葺・薬医門形式の表門を設け、敷地境界に築地塀を回した古式な表構をもつ。主屋は棧瓦葺・切妻造の大屋根を架け、平面は、東側にトオリニワ、西側の床上部に式台玄関をもつ二列×三室の部屋と西に物置を設けた三列構成である(図4)。こうした三列構成は、例えば瑜伽天満宮の社家東家とも類似し、旧奈良町の社家住宅に典型的な平面形式であった。架構は基本的に町家建築と同様だが、上手居室二列目の座敷部(表・中座敷)の梁間3間半に和小屋の架構(当初の母屋・束)が残されており(図5)、元の棟木からさらに「登り梁」を渡して下手と同じ大屋根を架構している。すなわち、主屋を特徴づける棧瓦葺・切妻造の大屋根は中古改造によるものであり、当初の座敷部は落棟形式で一列目の居室に連結されていたことが判明した。当初の平面図および模型の復原を(図6および模型写真)を示す。

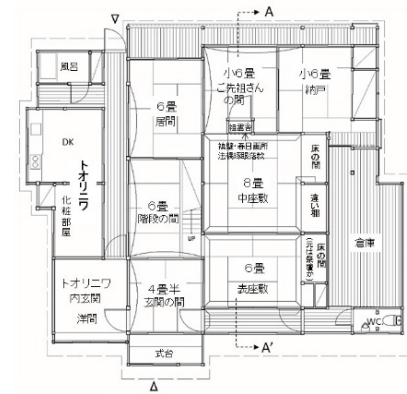


図4 平面図(現状)

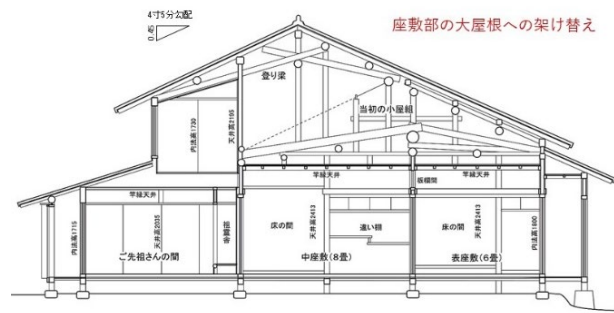
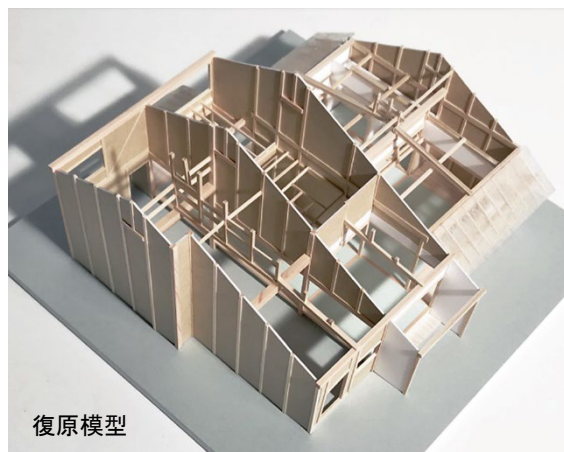


図5 断面図 A-A '(現状)



図6 平面図(復原)



復原模型

結び.

藤間家の所在する高畑町では、享保2年(1717)大火で家数が半減し、その復興過程で屋敷統合が進められ、藤間家のような間口規模の大きい短冊形地割に表門・築地塀・前庭・式台玄関などを設えた社家住宅の屋敷構が成立した。また、近世初期から職人・芸能民的な生業をもった祢宜家では、本来、奈良町一般の都市住民と同様の町家型の住居形態が基本であったとみられ、藤間家住宅が、18世紀後期の町家と同様に落棟形式で座敷部を連結し、その後の大屋根への架け替え等の増改築によって社家(祢宜)住宅にふさわしい格式をもつ大規模な主屋を確立した点が注目される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 伊藤裕久	4. 巻 第799号
2. 論文標題 中世末から近世初における出雲大社門前町・杵築の空間構成と屋敷形態に関する考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『日本建築学会計画系論文集』	6. 最初と最後の頁 pp.1808-1819
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3130/aija.87.1808	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 伊藤裕久	4. 巻
2. 論文標題 備後国一宮吉備津神社における中近世社家屋敷の集住形態に関する考察 - 慶安5年(1652)『備後国一宮御供之帳』に記された社人屋敷について -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『2022年度日本建築学会関東支部研究報告集』	6. 最初と最後の頁 pp.421-424
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤裕久・濱定史・小見山慧子・山崎美樹	4. 巻 85
2. 論文標題 近世における春日大社社家町の変容過程と居住形態に関する研究 - 江戸時代における高畑の町並変遷と旧祢宜・藤間家住宅の建築的分析 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本建築学会計画系論文集	6. 最初と最後の頁 pp.1829-1839
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3130/aija.85.1829	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 伊藤 裕久	4. 巻 2
2. 論文標題 杵築の町並景観と空間構成の変遷 - 中世末から近世初における出雲大社門前町・杵築の空間構成と屋敷形態に関する考察（1）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『2019年度日本建築学会関東支部研究報告集』	6. 最初と最後の頁 pp.539-542
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤裕久	4. 巻 2
2. 論文標題 杵築の土地所有と屋敷形態の地域特性－ 中世末から近世初における出雲大社門前町・杵築の空間構成と屋敷形態に関する考察(2)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『2019年度日本建築学会関東支部研究報告集』	6. 最初と最後の頁 pp.543-546
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤裕久・濱定史・小見山慧子・山崎美樹	4. 巻 2
2. 論文標題 明治初頭における社家町の空間構成と居住形態 - 春日大社旧祢宜・藤間家住宅に関する調査研究(1)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『2018年度日本建築学会関東支部研究報告集』	6. 最初と最後の頁 pp.499-502
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤裕久・濱定史・小見山慧子・山崎美樹	4. 巻 2
2. 論文標題 近世における社家町の変容過程と居住形態 - 春日大社旧祢宜・藤間家住宅に関する調査研究(2)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『2018年度日本建築学会関東支部研究報告集』	6. 最初と最後の頁 pp.503-506
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小見山慧子・山崎美樹・伊藤裕久・濱定史	4. 巻 2
2. 論文標題 藤間家住宅の屋敷構と主屋の空間構成 - 春日大社旧祢宜・藤間家住宅に関する調査研究(3)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『2018年度日本建築学会関東支部研究報告集』	6. 最初と最後の頁 pp.507-510
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎美樹・小見山慧子・伊藤裕久・濱定史	4. 巻 2
2. 論文標題 藤間家住宅の当初復原と増改築過程 - 春日大社旧祓宜・藤間家住宅に関する調査研究(4)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『2018年度日本建築学会関東支部研究報告集』	6. 最初と最後の頁 pp.511-514
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤裕久	4. 巻 2
2. 論文標題 近代初頭における出雲大社・社家屋敷の分布特性に関する考察 - 明治4年(1871)「出雲国大社神地略図面」を主な史料として -	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 『2023年度日本建築学会関東支部研究報告集』	6. 最初と最後の頁 pp.551-554
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件(うち招待講演 1件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 伊藤裕久
2. 発表標題 杵築の町並景観と空間構成の変遷 - 中世末から近世初における出雲大社門前町・杵築の空間構成と屋敷形態に関する考察(1)
3. 学会等名 2019年度日本建築学会関東支部研究報告会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 伊藤裕久
2. 発表標題 杵築の土地所有と屋敷形態の地域特性 - 中世末から近世初における出雲大社門前町・杵築の空間構成と屋敷形態に関する考察(2)
3. 学会等名 2019年度日本建築学会関東支部研究報告会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 伊藤裕久
2. 発表標題 藤間家の建築と歴史
3. 学会等名 春日大社（奈良県）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 伊藤裕久・濱定史・小見山慧子・山崎美樹
2. 発表標題 明治初頭における社家町の空間構成と居住形態 - 春日大社旧祢宜・藤間家住宅に関する調査研究(1)
3. 学会等名 2018年度日本建築学会関東支部研究報告会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊藤裕久・濱定史・小見山慧子・山崎美樹
2. 発表標題 近世における社家町の変容過程と居住形態 - 春日大社旧祢宜・藤間家住宅に関する調査研究(2)
3. 学会等名 2018年度日本建築学会関東支部研究報告会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小見山慧子・山崎美樹・伊藤裕久・濱定史
2. 発表標題 藤間家住宅の屋敷構と主屋の空間構成 - 春日大社旧祢宜・藤間家住宅に関する調査研究(3),
3. 学会等名 2018年度日本建築学会関東支部研究報告会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山崎美樹・小見山慧子・伊藤裕久・濱定史
2. 発表標題 藤間家住宅の当初復原と増改築過程 - 春日大社旧祢宜・藤間家住宅に関する調査研究(4)
3. 学会等名 2018年度日本建築学会関東支部研究報告会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊藤裕久
2. 発表標題 備後国一宮吉備津神社における中近世社家屋敷の集住形態に関する考察 - 慶安5年(1652)『備後国一之宮 御供之帳』に記された社人屋敷について -
3. 学会等名 2022年度日本建築学会関東支部研究報告会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 伊藤裕久
2. 発表標題 近代初頭における出雲大社・社家屋敷の分布特性に関する考察 - 明治4年(1871)「出雲国大社神地略図面」を主な史料として -
3. 学会等名 2023年度日本建築学会関東支部研究報告会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

旧春日社祢宜・藤間家住宅は2018年に国登録有形文化財（建造物）として選定され、合わせてアーティスト・イン・レジデンスとしての保存活用事業を民間（高畑トラスト）で展開している。改修中に開催されたレストレーションギャラリーなど、その活動をサポートした。また実測調査の研究成果とあわせてAIR活用のためのリノベーション案などを『高畑AIR歴史資源活用モデル検討事業報告書』（平成30年度文化庁委託：NPO等による文化財建造物管理活用の自立支援モデル検討事業）、一般社団法人高畑トラスト、2019.03に掲載している。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	山崎 美樹 (YAMAZAKI MIKI)	川田工業株式会社・建築事業部	
研究協力者	小見山 慧子 (KOMIYAMA KEIKO)	(株)日建設計・設計部	
連携研究者	濱 定史 (HAMA SADASHI) (40632477)	山形大学・工学部・准教授 (11501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関